ID 論と「くさび運動」

1987 年にルイジアナの「平等な取扱い」法の違憲判決が出て、ヘンリー・モリスらの創造研究所の路線で公立学校の生物学教育に創造科学を含ませるのが難しいことが分かると、創造科学の支持者たちは新たな路線を模索しはじめた。その新しい方向付けの中心となったのがフィリップ・ジョンソンであり、彼の提唱する「知的設計論」(intelligent design theory、略して ID 論と呼ばれる)と「くさび運動」(Wedge Movement)である。

ジョンソンは元来カリフォルニア大学バークレー校で教鞭をとる法律学者であったが、離婚をきっかけに熱心なキリスト者へと改宗した(それまではあまり信心深い方ではなかったという)。その後 1987 年にロンドンで在外研究をしているときジョンソンはドーキンスの『盲目の時計職人』(この本は一般向けの進化論解説書として非常にすぐれている)を読み、進化論を動かしているのが科学的な証拠ではなく、自然主義や唯物論といった哲学であるという印象をうける。ジョンソンは 1991 年に『裁かれるダーウィン』(Darwin on Trial)という書物を出版する。この本はグールドら進化論者から厳しい批判を受けたが、同時に志を同じくする研究者たちを引き寄せる効果も持った。その中には生物学者のポール・チェン、同じく生物学者のディーン・ケニヨン、生化学者のマイケル・ベーエ、科学哲学者のスティーヴン・マイヤー、哲学者のウィリアム・デムスキーなどがいた。彼らは密接な連絡をとり、ID 論の研究グループを形成していった。

1996 年、ジョンソンらは、ディスカバリーインスティテュート(Discovery Institute)というシアトルのシンクタンクの下に「科学と文化の革新センター」(Center for the Renewal of Science and Culture)を設立する(現在は「革新」という言葉がおちて「科学文化センター」(CSC)となっている)。チェン、ベーエ、マイヤー、デムスキーらもまたこのセンターの非常勤研究員となり、ID 論を広める運動を進める(くさび運動という言葉も、巨木にくさびを打ち込んで倒すように進化論を倒していこうという意図をこめてこのころ作られたようである)。

ジョンソンらの運動は急速に影響力を強めていく。ジョンソン自身も多数の著作を出版しているほか、ベーエの『ダーウィンのブラックボックス』も一般の関心をあつめた。1999 年にはカンサス州の教育委員会で進化論教育を禁じる決定がなされた。2005 年 8 月には、ブッシュ大統領がインタビューで「ID 論も学校で教えられるべきだ」と発言したと報じられる一方、12 月にはペンシルバニア州で公立学校における ID 論教育が政教分離に反するという判決が出た。ペンシルバニアで使われていたのは、ケニヨンらが 1989 年に作った ID 論の教科書、『パンダと人間について』であった。ID 論はかつての「創造科学」という言葉をおしのけて、反進化論の代名詞となってきている。

くさび運動が老舗の創造研究所をおしのけてこうした影響力を持つに至った理由はいくつか考えられる。まず、創造研究所の創造科学運動はリーダーのモリスが若い地球派であったこともあり、洪水地質学など、若い地球派に特有の議論を多く行っていた。それに対してジョンソンらはいずれも古い地球派であり、化石資料や地球の年齢など地質学的事実に関してはまったく正統派の科学と対立しない。さらに、非常に小規模な進化であれば ID 論でも認められる。こうした穏健さ(比較的、だが)のためにくさび運動は先行する創造科学運動より受け入れやすくなっている(ただしキリスト教原理主義者

にとっては若干ものたりないところでもあるだろう)。
次に、モリスらがアカデミズムからはみ出した存在であったのに対し、ジョンソン、ベーエ、チャンといったくさび運動の中心メンバーたちは有名大学に職をもっており、学者・研究者として成功した人たちである。彼らの書き物から受ける印象もまた、モリスら旧世代の書き物とはだいぶ違い、かなり洗練された印象をうける。
彼らは、生命のそもそもの発生は「知的な計画」による創造であると主張し、生物学者が「大進化」と呼ぶものも新たな形態の生物が「知的な計画」によって創造されたものだと主張している（注意が必要なところだが、彼らの立場はあくまで反進化論なので、「知的な計画に導かれた進化」があったと主張しているわけではない)。創造科学運動の戦略を踏襲して、彼らも「神」という言葉は注意深くさけている。「カンブリア大爆発」は、既成の進化論の観点からは骨格を持つ生物が急速に増えて化石が残るようになった時期ということになるが、ID 論の観点からは生物が（非常に完成された形で）初めて創造された時期ということになる。つまり、そもそものところで ID 論は（ノアの洪水があった、といった議論に比べれば）物的反証の出にくいかなり微妙な論点で論争をしているのである。
くさび運動は反進化論の議論の焦点を進化論の背景にある形而上学的プログラムと証拠の不足という二つの点にしぼる。ジョンソンは、進化論は唯物論・自然主義の形而上学を背景としているため、非物質的なもの、超自然的なものはそもそも説明の道具として使ってはいけない「禁じ手」になっている、と批判する。そして、そういうものを禁じ手にするという決定自体は何の根拠もないじゃないか、というわけである。この点については、科学哲学の学位を持つマイヤーがポパーの議論などを引用してさらに補強を行い、方法論的には自然主義的方法論も設計を認める方法論も同値じゃないか、と論じている。
証拠の不足という点については、創造科学運動が言っていたこととそれほど違うことを言うわけではない（しかしもちろん年代測定の信頼性を否定したり地層の層序の規則性を否定したりする必要はないので ID 論は楽である)。化石資料の欠落、特にカンブリア大爆発以前の化石資料の欠落は彼らがよく持ち出す議論である。工業暗化など短い期間で発生した進化の証拠については、それはせいぜい小進化の証拠でしかなく、大進化の証拠にはならないという。
設計者の存在を積極的に擁護する議論はどうだろうか。ジョンソンらはこの面の議論については「こんなに複雑で精妙なものが設計なしに生じるはずがない、だから設計者がいるはずだ」という一点ばりである。この議論自体は１９世紀からある議論の焼き直しであるが、生化学などの新しい事例が使われている。たとえばベーエは鍵と鍵穴の構造を持つ生化学的メカニズムの存在を指摘し、鍵と鍵穴が同時に発生しないかぎりこんなメカニズムが発生するはずがないと論じる。
くさび運動は学校教育へ ID 論を導入させようとする際の論法においても洗練されている。彼らの議論は大筋以下のようなものになる。「進化論が正しいかどうかについては科学者の間でも論争がある。だったら論争があること自体を学校で教えて、子供たちにバランスのとれた判断をする能力を身につけさせるべきではないか」。この議論をひとことであらわすのが、「論争を教えよ」(teach the controversy)というスローガンである。ジョンソンやベーエらが本を出し、それが科学者たちから非難されればさ

れるほど、「科学者の間で論争がある」という議論は（特に非科学者に対して）説得力を持つことになる。なかなか巧妙といわざるをえない。
もちろん以上のような主張のすべてに対してグールドやドーキンスをはじめとした科学者たちやルースやペノックといった科学哲学者からの反論がある。
法律論争としては、「知的な創造」が宗教的な概念かどうかが問題になるだろう。しかし科学哲学は元来何が宗教かを判定するようにはできていない（そういう問題設定になっていない）。せいぜい何が科学的でないかが判定できる程度である（そこから「科学的じゃないものをあえて科学と称して売ろうとするのは宗教教育という意図が背後にあるからだろう」と推測するのはかまわないであろうが）。
科学哲学的には、「ID 論プログラム」が「進化論プログラム」と比肩しうるような研究プログラムかどうかという点が問題になる。大半の科学哲学者にとって答えは否定的である（ちなみにマイヤーは科学哲学者としての業績はほとんどないに等しい）。その理由はいくつかある。
生物学の歴史をひもとけば、１９世紀以来、「とても設計者なしでは説明できない」と思われていたものが、少しずつ自然選択をはじめとした設計以外のやり方で説明されるようになっており、それこそが現在の生物学を築いている。今のところ（ベーエの主張に反して）その流れに原理的な壁は存在していない。生命そのものがどうやって発生したかの謎はおそらく最後まで残るであろうが、それにしても手がかりがないわけではない（そしていずれにせよ生命の発生についての理論と進化についての理論はお互いに独立である）。
他方、設計者をもちだすことは一種の思考停止となる。「誰かがそう設計したんだよ」と言ってしまったら、それ以上どうやってそれが発生したかの探求をすることがなくなり、進歩が止まってしまうわけである。他に選択肢がないというならともかく、せっかく進化論という着実に前進しているプログラムがあるのにわざわざ ID 論を受け入れて立ち止まる必要はない。
もう一つこの文脈でよく出てくるのが「オッカムのかみそり」である。これは、科学においては「なしで済ませられるものはなしで済ませましょう」というルールである。非物質的・超自然的な設計者なしで説明がつくのなら、そういう設計者をもってきて説明するよりもよい説明になる。進化論が現在唯物論や自然主義と言えるような形而上学を前提としているのは、以上のような利点の結果なのであって、ドグマ的に受け入れているわけではない。
「論争を教える」ことについても当然批判がある。まず、進化があったということについて「科学的」な論争は存在していない、というのが進化論側の統一見解である。ジョンソンやベーエは科学の学術誌で ID 論を展開しているわけではない（投稿はしているかもしれないが掲載されることはまずない）。論争があるというには彼らは圧倒的な少数派であるし、問題となっている分野についてきちんと学術的なトレーニングを受けているわけでもない（生化学者のベーエはこの点では例外的だが、彼とても進化論についてのトレーニングを受けてきたわけではない）。また、「論争を教える」というと聞こえがよいが、両方の立場が同じくらい根拠があるという誤った印象を子供たちに与えかねない。
以上のような議論をふまえるなら、ID 論が科学かどうかという線引きの問題はともかくとして、ID 論を受け入れるのも教えるのも非常にまずいやり方だというくらいのことは科学哲学的にもいえそう

である。